OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	小島吉雄教授の御退官に寄す
Author(s)	田中, 裕
Citation	語文. 1965, 25, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68556
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

小島吉雄博士近影

小島吉雄教授の御退官に寄す

田中裕

小島吉雄教授は昨年三月三十一日をもって停年退官せられた。思へば昭和二十三年十月、本学法文学部の開設に当り、国文学講座の創設を委嘱せられて、九州大学に御在職のまゝ講師を兼任、翌年教授となって来任せられ、国文学科並びに国語国文学会を主宰せられたのであるが、爾来早くも十六年の歳月が経過したのである。

前任地九州大学も先生が大学卒業後間もなく赴任せられて、創設せられたばかりの国文学講座の整備に尽瘁せられたところと承るので、この両大学を通じて三十年にわたる講壇の御生活は一貫して開拓者のそれであったと申し上げるのがふさはしいであらう。本学でのそれはまさに後半に当るもので、先生におかれても思ひ出の少なからぬものがおありのことゝ推察するが、われわれとしてはこの間の先生の歩みがそのまゝわが国文学科の歴史に外ならなかったことに想到して、今御退官と共に最も重要な一時期が閉ぢられたといふ感慨を禁ずることができない。しかし先生はひとり国文学科ばかりでなく、実は文学部の歴史と共にあられたといふのが正しいであらう。即ちあるいは評議員、あるいは図書分館長、あるいは文学部長として草創期の苦労を最も深く分担せられた教授の一人であったことは人々の知悉するところであるが、しかしこの方面の御功績を讃へることは別にふさはしい方を得なければならない。

先生は本学に来任せられる二年前、学位論文であった「新古今和歌集の研究」正続二冊をすでに公刊せられてゐた外、中世歌論、連歌、俳諧に関する労作を積まれ、中世文学研究の第一人者として令名高く、加へて明治和歌史研究の開拓者としての御業績も周知に属してゐたのであるが、われわれはこの御円熟期における先生と御出会ひすることになったのであった。まことに何にも換へ難い幸ひであったといはなければならないが、しかしわれわれが先生の上に見出したものは、単に円熟した一専門家ではなくて、併せて優れた一人の文学研究者であった。先生の御学風などと僭越なもの言ひは避けなければならないが、先生の学問に窺はれる特色のおそらく重要な一つと思はれるものは、特定の時代・作品・作家に局限せられない、国文学全般にわたる該博な知見と、深い文学史的綜合とをもたれてゐたことであり、また

一つは先生の諸著に照して明らかな通り、精緻な文献学的調査研究が常に作品の瑞々しい享受と結ばれて、文学研究の本道を示されてゐたことではないかと思ふ。これは講壇や研究室においても常に変らぬ指導方針として堅持してゐられたものであったが、われわれは先生によって培養せられたかうした研究態度・方法をいつの日にか成熟・結実させるやう期するところがなければならないであらう。

先生の御事績を語るためには詳細な年譜と著作目録とを必要とするのであるが、まだ十分な資料も整はないまゝに、わづかに当座の備忘として、巻末に御略歴を掲げることしかできなかったことを遺憾に思ふ。従ってかうした条項に盛りえなかった点はあまりに多く、その中、学術会議や諸学会——全国国語国文学会、中世文学会、近世文学会、和歌文学会、俳文学会、大阪国文談話会等を通じての、広いそして指導的な学界での御活動などは、ぜひ触れなければならないことの一つとも感ずるのであるが、しかし今は暫く措き、特にわが国文学科にとって重要と思はれる御事績のいくつかについてのみ補説しておきたい。即ち御来任後間もない昭和二十四年一月には大阪大学国語国文学会を発会せられ、二十五年十一月には機関誌「語文」を創刊、二十七年には地元大阪の学芸に関する調査整理に着目せられて「近世大阪和学の研究」の題目で研究室を中心に共同研究を開始せられ、以後三年間文部省科学研究費による援助を受けられた。また研究室図書の充実には非常な努力を傾注せられ、そのため戦後のあの厳しい研究資金難の中で、土橋、忍頂寺、笹野氏其他、著名な蔵書のいくつかゞ収容せられたのであった。二十八年四月大学院両課程が設置せられるに至って国文学科の体制は完備し、御退官までに御薫陶を受けた学生はすべて百名を越えるのであるが、この十六年間の御講義をしのぶよすがにもと巻末に御講義題目を併載する。

最後に、先生の御人となりについて述べるのがあるいは順序であるかもしれない。しかしこれは殆んど賛語に近いやうにも思はれる。おそらく一度先生に接した方は深い印象をもたれたことゝ推察されるし、特に国語国文学会の方々の多彩な思ひ出が、いづれ「会報」誌上を飾ることにもなってゐるからである。

先生は御退官と同時に本学名誉教授になられ、また国語国文学会の名誉会長をもわづらはせ申し上げることゝなった。即ち御功績を仰ぐと共に、今後いよいよ忌憚のない御鞭韃をいただき、かつ渝らぬ温容に接したいと念願するからに外ならないが、それにつけても切に南山の寿を祈り申し上げる。

（一九六五・一・二〇）